

○平成20年度海外派遣研修

「中国における大学生のメンタルヘルスについて」

医科学センター 講師 山川 百合子

○期 間 平成20年8月30日～ 9月5日(7日間)

○研修先 中華人民共和国, 広東省広州市, 華南農業大学、暨南（ジナン）大学医学部第一附属病院

1. 研修の目的

日本では1990年代後半から自殺死が3万人を超え、2006年の自殺対策基本法により自殺予防は国家のプロジェクトとなった。自殺は大学生の年代の死因の1位を占め、大学のメンタルヘルス支援においても大きなテーマとなっている。一方、WHOの調査によると、中国でも自殺率は世界で25位（人口10万人あたり13.9人）となり、世界の自殺人口のほぼ5分の2に達している²⁾。中国では男性よりも女性の自殺率が高く、青年期と老年期に多いのが特徴である。特に大学生の自殺の背景には著しい経済発展に伴う就職への市場原理の導入があり、就職難が大学生への大きなストレスとなっていると考えられている。また一人っ子政策によるストレス耐性の弱さも指摘されている。就職に関する大学生のストレスやその耐性の弱さは中国だけの実情とは言い切れず、日中共通の課題とも考えられる。

そこで本研修では学生相談を担当する立場として、華南農業大学で学生相談担当教員や学生を対象に大学生のメンタルヘルスについて講演し、大学教育におけるメンタルヘルス支援のあり方について検討する。

2. 研修の概要

＜華南農業大学について＞

華南農業大学は広東省の省都である広州市にあり、1909年の創立から約100年の歴史を持つ。広州市は約2800年の歴史を持つ華南最大の都市で、現在は日系企業など海外の企業進出が進行中で、国内の三大金融センターの一つとして中国の経済発展を象徴する都市でもある（写真1）。華南農業大学（写真2）は農業に関するほぼすべての分野（蚕糸、害虫、農業経営管理、果樹、畜産、園芸、分子生物学、農業を利用した芸術など）を網羅した22学部を持つ。大学キャンパスは550ヘクタール、学内には教員約2500人、学部学生約32500人、修士課程学生約3200人、博士課程学生約600人など合わせて40000人近い学生が在籍している。学生は全員が学内の学生寮で生活している。また学内に、学生や教職員だけでなく広く一般に開放されている華南農業大学医院という入院施設を持つ病院を持ち、学生の健康診断などはこの医院の医師が行っている。

写真1 広州市（筆者撮影）



写真2 華南農業大学構内（筆者撮影）



＜大学生のメンタルヘルスの講演＞

9月1日に芸術学院講堂において19：30より講演を行った。（写真3）通訳は名古屋大学に留学経験のある華南理工科大学外国語学院の錢紅日副教授が担当した。学部学生、大学院生や学生相談担当の教員など200名以上が参加した。

講演内容は、1）茨城県立医療大学の説明、2）日本の少子高齢化の現状、3）日本の大学の役割、4）大学における学生相談の意義、5）日本の大学生気質、6）付属病院デイケアにおける園芸療法の試みであった。本学の概観、授業の様子、卒業式などパンフレットにある写真を用いて説明した。また日本の大学が全入時代を迎え、さまざまな学生が入学するため、学生生活の支援は学生相談を含め一部の教員だけでなく広く全教職員の関与が必要とされていることを説明した。また障害者の就学支援や療学支援の役割にも言及した。茨城県立医療大学の学生相談のシステム（カウンセラーの人数構成、メールによる予約制、守秘義務など）について説明し、相談の内容の分類や、そのうち精神的問題が約6割を占めることなどを説明した。さらに現代の大学生の親との密な関係性、周囲の人間関係のネットワークの希薄さやストレス耐性の弱さなどについても説明した。最後に農学と精神医療との共同研究としての園芸療法について写真や心理的なデータを交えて解説した。

最後の質問は次々に手が上がり、活発な意見交換がなされた。主な質問と回答を以下に挙げる。

Q1この大学では学生相談が受けにくい、工夫をしているのか？→A1学生相談室の場所は他の人と顔を合わせにくい独立した部屋である。またメールで予約し、守秘義務が守られている。Q2学生同士の交流が難しい→A2これは本学でも学生の悩みとしてある。クラスには担任と副担任をつけ、身近な悩みや勉強については個人的に相談に乗っている。また少人数制の授業もあり、教員が学生同士で交流できるように工夫している。Q3中国では農業をやっても希望がないが、園芸療法で精神障害者は希望が持てるようになるのか？→A3このデイケアの園芸プログラムは職業訓練ではなく、QOLをあげるためのリハビリテーションである。植物を育てることで心が癒され、前向きな気持ちになることが目的である。この園芸プログラムへの参加は本人の自由意志に任せており、強制ではない。また日本では農業や園芸は決して希望の持てない職業ではない。

これ以外にも日本の大学の「障害者支援」や「療学支援」について驚きの反応があった。大学教育をユニバーサルアクセスと捉える日本と少数精鋭のエリート教育とする中国との相違が感じられた。

写真3 華南農業大学での講演



3. まとめ

今回の研修や講演は、中国の大学生の現状を日本と比較し、日常的に大学生の心理として当たり前と考えていることを改めて考え直す機会となった。

日本では昭和25年～35年までの大学進学率は約10%と、現在の中国と同程度であった。昭和50年代には大学進学率は25%となり平成になってからは直線的に上昇し現在は50%に近付きつつある。かつて経済が右上がりの時代には、大学卒業の学歴を持つ割合が少なく大学を卒業するだけで、ある程度の就職先や生活レベルの保障があった。

一方現在は大学卒という学歴だけではその保障はなく、さらなるキャリアアップにつながる資格を持つことが重要とされている。そして学生は多くの情報の中から、自分の能力を勘案して、何を選択するのか、例えばどの大学を選択するか、どの資格を選択するかなど「自分で選ぶ能力」を養っていくことが必要とされる。その選ぶ選択肢をいかに多く示せるのか、それが教育であると考えられる。

しかし、学生にとって、その選択はその後の人生への責任がかかったものになる。そこには、中国のように、大きな格差のある中で大学入学がステップアップのチャンスになる激しい競争とは、また違う厳しさがある。したがってその厳しさの中で選択し、時には傷つき時には後悔しながら自分で道を開いていく学生が、癒されながら自分の選んだ道が正しいと思えるような学生相談が必要となろう。